

『あの人の好きなもの』

株式会社虎屋 横浜高島屋売店

大谷 菜摘

「とらやさんの最中いただける？」杖をつきながらゆっくりとやってきたご婦人が私におっしゃいました。いつものようにご用途を伺うと、数年前に旦那様を亡くされていて、命日には必ずとらやの羊羹や最中を仏壇にお供えされていることをお話くださいました。

「お供え物でしたら、赤いものはお抜きし茶と白の最中でご用意いたしましょうか」

最中の皮の色は中の餡の違いによって紅・白・茶の三種類ご用意があります。仏事でお使いの場合は紅などの華やかな色味のものはお抜きすることをご提案しているので、いつも通りにそう伺いました。すると

「紅と白にしてちょうだい。あの人はこし餡が好きだったから。あとその方が、ぱっと明るくてお供えしたときに、私も向こうも寂しい気持ちにならないでしょう」。

そのような想いや感じ方もあるのかと、目からウロコでした。同時に仏事に地味な色味という考えが“常識”であり“正解”だと思い込んでいた自分の頭の硬さを思い知らされました。

「これからもあの人の分まで少しでも長生きして、大好きだったとらやさんのお菓子をたくさん食べなきゃね」。そうおっしゃってにっこりと微笑み、お帰りの際には

「また来るから、それまでお互い元気ががんばりましょうね」。

と温かいお言葉をかけてくださいました。これまでも、結婚や出産とおお客様の人生の節目に立ち会っていると実感することは何度もありましたが、自分の販売したお菓子がおお客様の人生に寄り添っていると感じたのは初めての経験でした。

忙しい店舗にいと、日々の業務に追われ、大切なものを見失いそうになります。わざわざ足を運んでくださり、たくさんある菓子屋の中でとらやを選んでお買い物をして下さっていること。その背景に何があるのか想いを馳せることまで、できていませんでした。

お客様一人ひとりの様々な想いに寄り添うことが、何よりも喜んで召し上がっていただけることに繋がるのだと、気付かされた出会いでした。